

是が我古代墓制史上に於いて如何なる位置を占めるかを論じたものであり、尙附録として石枕造附石棺を聚成して一段の光輝を加へて居る。

近時、古墳研究が動もすれば荒涼を覺えられる折柄、かゝる特殊の古墳の綜合的研究のあらはれたことは、確かに大いなる價值と深い意義とを齎すものであらう。しかもその内容に於いて、その記述といひその考證といひ、穩健にして洗練せられ圓熟にして妥當、さすが氏の勞作と首肯される點が多い。併しながら、穩健圓熟の内容は一面に於いて、一脈の氣魄の缺けて居る憾みを懷かしめないだらうか。或事に身も魂も打ち込んだ若人の持つ様な潑刺たる意氣ときびくした力との漂つて居らぬことを物足らなく思つたのは、果して私一人のみの直感であらうか。尙又、この著書に於いて、從來の古墳報告の體裁より一步も外に出でず、石塚なる注意すべき構造の例もたゞ從來の報告の類型に押し込んで居ることは、又物足らなく感じた所である。無論これこそ忠實なる考古學の研究かも知れない。併し、例へば後論に於いて單なる外的研究のみなる從來の型を踏襲する以上に、何等かの内的研究を加味して更に更に石塚の持つ特異性を強調することは出来なかつたか。かくしてこそ初めてこの報告に滾々たる清泉は涌き出でなかつたか。一例せんか。死體を固く封じた積石に對して信仰的方面的考察に幾頁かを割かれなかつたか。積石の壯大なる築造に就いて更に一段の技術的方面的留意が出来なかつたか。無數の積石の運搬利用に於い

て或は記録より或は土俗より或は現代の土木工學の知識より何等かの興味深き考察が導かれなかつたか。

ともあれ、これ等の望對の感は如何にあらうとも、本著者の我古墳研究史上に投ぜんとする意義の大なることは論を俟たない。古墳研究の難き濃霧を通じて燦然と輝く此等の星の名の永遠に傳はり、その光りの永久に消えないことを祈つてやまない。(四六倍版、一三頁、圖版四五插圖四〇、刀江書院賣捌、定價七圓)〔齋藤 忠〕

### ●賀茂傳説考

肥後和男著

東京文理科大学文科紀要第七卷として發表せられたる肥後和男氏の「賀茂傳説考」は、近時公表せられたる此の種論文中、最も出色のものとして、學界の注意を喚起したい好著である。著者はこの論文によつて唯に山城の賀茂を論ずるのみでなく、それによつて廣く一般に我が古代信仰並にその基礎となりたる古代生活そのもの、解釋に對して、從來諸家の試みし所に更に大なる寄與を加へんとの意氣込を以てこの事に當り、學界の荊棘に更に一條の小徑を通じたかの概を示してゐる。

著者は最初に賀茂の起源に關する資料として、釋日本紀に引用せられたる可茂社に關する山城國風土記の逸文をはじめ、本朝月令所引の秦氏本系帳の文、其他袖中抄年中行事秘抄等から必要な文獻的資料を抽出し、第二章に於てこれ等諸文獻の語を所を解釋するに先だつて、その採用した研究方法たる民俗學的方法に就ての著者の抱懷する見解を簡明に敘述してゐるので

ある。

第三章以下は本論ともいふべきであつて、「カモタケツツミの觀念」「八咫鳥」「葛木鳴との關係」「天神と地祇」「神の遍歴譚」「矢取神事と水口祭」「矢となれる父神」「若宮の降誕」「三井社」「競馬と猪頭」の都合十章から成つて居り、賀茂關係の重要な事項の逐一に就て著者はその所見を大膽に吐露し、最後の第十三章に於て全編の總括として、賀茂傳説の最も原始的な形を考へ、それが如何なる過程を経て風土記に見るが如きものにまで發展し來つたかを推論してゐるのである。この間に於ける著者の推論はかなり多岐に亘り、一々こゝに紹介論評する事は容易でない。

著者が我が古代文化の闡明に就て、従來人一倍の熱意を以てその蘊蓄を深めつゝあつた事は同學の等しく承認する所、而して本論文は過去久しきに亘るその造詣を傾けて作成せられた觀がある。實際著者は茲數年殆ど寧日なきまでに寒暑をいとほず、克明に田舎を巡歴し、口碑をたづね、傳承を究め、乏しき文獻的資料をあさり、専ら實地に就て研究の歩武を進める事につとめ、或は鎮守叢祠の祭禮に幾夜を徹して考察を盡した。古代文化研究の學徒としての著者の熱誠と努力とはまことに敬服に堪へぬものがある。本論文に於て著者が試みし果敢なる臆説や、斷案にはよし全幅的賛意を表し得ない多くな含んでゐるとはいへ、この眞摯なる學徒が全力を傾けて作成した本論文には所在その獨自の研鑽に基く新味の溢れた推論が記されて居

り、示唆に富んだ推考が爲されてゐる。前世紀以來考古學的的研究はその輝かしい業績によつて未知の古代社會に於ける物質文明を明かにした。今や民俗學的研究は考古學の尙よく充分なる成果を擧げ得なかつた古代社會の心に就ての考察にその機能を充たし始めてゐる。而して本論文は我が古代文化の心核に觸れんとして試みられた一試論として古代研究に關心を持つ大方人士の一顧すべき近頃の好著である。(四六倍版一六頁 定價一・一〇、發賣所丸善) (山根)

●京都帝國大學  
國史研究室藏 史料集

京大國史研究室編

京都帝國大學國史研究室では早くより古文書室なる一室を設けてその蒐集に従事し學問研究に資すると共に史料の散佚を防いだ。この事は着手の期早きと地理の恵まれし點よりして約二十六年の間二萬餘點に及び、學界に著聞せる優秀なるもの尠しとしない。故三浦教授は本學で古文書學を講じこの蒐集に専心された爲め、早くより優れたるものを簡び刊行の志を有たれたが不幸災筮のために果さず、今その遺志を受けて完成されたものが本書である。

收むるところ五十五點、公武庶民の文書の形式を異にし内容に異なるものを集め、政治經濟より宗教藝能にまで及び、自筆本建内記等の記録、畫像、器物をも含む。其等を六十七葉の玻璃版に印し外に目次一葉、及び解説一冊を附して、その實大寸